

明日香を支えた貝ボタン

かつて村では貝ボタンの生産が盛んでした。家の下から見つかった貝ボタンからそのたどった歴史をみていきます。

村にある住宅の下を少し掘ると、表土から貝殻の破片が出てくことがあります。土の中から白く光った艶やかな破片が、ときに何か所も。その宝石のようなきれいな破片のなかには、小さい穴がたくさん開いたピンクと白の縞々の貝殻。そして、ごくわずかだけある平たくて小さい、径が整った丸い未成品。これこそがかつて村の産業を支えた貝ボタン工場からでた産物たちです。

村の貝ボタン工業については、村が発行した「明日香村史」や文化協会が発行した「繫・明日香村」の大字に伝わるはなし」に詳しく記されています。これらの本を参考にすると、大正時代初期、旧飛

鳥村では貝ボタン工業が主要産業になっていました。当時の時代背景をみると、農業だけで生業を自立させることが難しく、旧飛鳥村では大正元年（1912年）から貝ボタンの製造事業がはじまりました。第一次世界大戦後の大正7年8年頃にピークを迎えると飛鳥では貝ボタンを手がけない者はいないと言われるほどの隆盛を誇りました。その後、第二次世界大戦後になると、いち早く生産を再開し、朝鮮戦争後の昭和31年（1956年）頃には最盛期を迎えました。しかし、その後はプラスチックの製品が登場したことと、貝など天然物による生産が圧迫され徐々に衰退していきました。そし

て、村では貝ボタン工業は零細な産業となり、ひと昔前まで細々と生産が続いていたようです。では、なぜかつて村で貝ボタン産業が栄えたのでしょうか。色々な要因が考えられます。ひとつは村の地の利です。近くに飛鳥川という水質の良い水が得られたことです。川の水によって貝の漂白がきれいに仕上がったのです。もうひとつ地の利として考えられるのは、工場近くに街道があり、それが当時の鉄道駅に直結していました。海で採取された貝を運び、製品を作つて出荷する輸送経路が整つていたのです。飛鳥時代の飛鳥には官道が通り、肥沃な飛鳥川の近くには宮殿や寺院が建てられました。飛鳥時代の官道は後に街道となつて、現在は県道や国道に踏襲されています。飛鳥時代の地の利が、大正・昭和という時代にも地の利となつて貝ボタン産業に発展をもたらしたといえるでしょう。

貝ボタンの原料には高瀬貝と黒蝶貝が使われました。これらの貝はフィリピンやインドネシア、セレベス海で採取されました。当時、大阪の卸業者を通じて村に搬入されました。貝ボタンまでの製作工

程は、くり抜き、仕上げ、包装、出荷です。どの工程も人の手による細かな作業を経て、美しく高品質のボタンが出来上がります。家の下や庭先の土中から出ているのは、くり抜いたあとの貝殻が圧倒的に多く、あとは失敗してしまった未成品です。不用となつた貝の破片ですが、これも村の歴史を語る歴史遺産です。飛鳥の土に埋もれた貝殻たちは、往事の面影とともにいまも鮮やかな光彩を放っています。

（明日香村教育委員会文化財課）



▲出土した貝ボタンの未成品